

思われる。なお屋敷は現在スーパ
ーサニーと変わっている。
その四、同じ富野の須賀神社の
鳥居のそばに、三つに切り離され
たのが横たわっていたが、今は一
本だけになっている。
その五、小倉城内筆塚の前に、
同じ石柱が一本立っている。
以上、九本の橋脚が現存してい
る。いずれも常盤橋のものと思わ
れる。まだ水底にあるかも知れな
い。常盤橋は文政十年と、天保三
年に架橋または橋脚を取り替えら
れていることが明らかである。

残影への郷愁

小倉北区 綿森利雄

会報第一〇号に劉先生が無名の
文化財として先祖が残した生活用
具類をその年代を物語る貴重な教
材にと解かれておられました。誠
にお同感の至りであります。

数年來の大量消費時代とやらで
何だか代々家に蓋蔵された古物類
は手元に置くのも辱しい様な状態
に押込まれて多少塵箱行もありま
した。

生活用品として私達物心付いて
より長い生活環境の中に次第に時
世の推移に破壊され消滅されてき
つつあります。

殊に印象深く脳裏に焼付いてい
る幾つかの街のたたずまいが浮ん
でくるのです。

小倉城外堀紫川以西電車通りに

添って大門まで両側一円。
十二師団練兵場広い草原、
中央に柿の木一本あり。周囲は
籐土手。

あかずの浜 現在小倉駅附近
より長浜手前まで鉄道以北の砂
浜、街の身近かな海水浴、涼み場
常盤橋鉄の手摺 両袖の広告
塔は色々変わったが小倉を東西に
二つに割った思い出多き橋。殊
に鉄製の手摺により添い夕涼な
どで賑った。

門司駅の長い棧橋 門司港終
着駅の長いホーム、続いて長い
棧橋通路、重い荷物をさげて旅
行者は先を競って乗下船した。

香春口の馬車鉄(北方四四連
隊競馬場等の往復に利用された

単線馬車鉄道で馬の鈴音もほ
えましい。
東小倉駅石段 電車で富野停
留所を下車すると急な石段を走
下り小さな小倉鉄道東小倉始発
駅に飛込む、郊外へハイキング
などの客で賑った。

板櫃川周辺 国鉄小倉汽車工
場裏から日豊線路西側に添って
大門橋、発電所、八坂神社、
(鑄物師町鎮座)を廻って平松
極楽橋へ流れていた板櫃川は川
遊びに小魚採りに賑った。殊に
旧制小倉中学校前方の菜園場湿
地帯は動植物の宝庫だった。

洞海と八幡製鉄 美しい洞海
のカプトガニ取りの帰りに振り
返れば十数本のエントツから出
る煙の波にピカリピ
カリと溶鉱炉の光が
走り何だか力強い生
命力を誇示している
様でダイナミックな
風景。湾の白い水面
との対比が印象的。

若松渡船場 乗船
してから二、三分ピ
タリピタリと船場を
打つ波のどか。大
きな船が通過中だ。
隣の荷物渡船の浪除
用松杭丸太に大きな
浪が当たる。何か小
魚が二、三匹走った。
折尾駅附近 独特



若松区 片山正信氏 作

折尾駅附近 独特

の交通ターミナル何だか大都会
の一隅の如く筑豊の香のする人
々の動きと港の風物。
中原松原海岸 白砂青松遠く
名護屋の浜を望み緑と白の線、
夏の海水浴場、浜遊び。

平松地藏松原 石の地藏を中
心に浜添を走る列車事故者の無
縁塚か、気味悪い松原として印
象に残る。

中井金玉坂 中井口を南に坂
を上ると樹木うつ蒼と道をさえ
ぎり峠又峠。東側は深い谷でS
字カーブは救い、何者かに追
掛けられているようで走って戸
畑中原へ下る。

明治専門体育祭 毎年秋に北
九州近隣中等校の野球、テニス
柔剣道等の選抜試合と明専独特
の体育祭カーニバルで当時(大
正時代)年中行事の一つとして
楽しんだ。

既に到津の畑間氏(水彩)や若
松の片山氏(版画)のように消滅
以前の風物をとらえ、作品として
完成させた方々がおられます。

昭和の諸氏が御覧になってその
地域が当時を想像され如何に変貌
激しさに驚かされると同時に今
昔の感にたえないことと思われま
す。これも生活文化の記録として
得難いものではないでしょうか。

私も時にふれなつかしい当時の一
コマを想起するまま書いてみます
が、拙ない表現に終始するので靴
の感と深くするのは、

痒の感を深くするのは、
残影として記憶にある限り一枚
でも紙面に再現したいと思いま
す。が、私一人のみの郷愁でし
ょうか。

事務局だより

▽すっかり暖かくなり、各地の桜
だよりもちらほら聞かれ始めまし
た。会報十一号ができてしまし
たのでお届けします。

▽四十九年度は、長い間会の発展
に尽力くださいました菊池会長
の急逝、あるいは会員の大幅減少と
いう事態に直面し、事業計画の完
遂さえも不可能ではないかと案じ
ていましたが、予定どおりの事業
を消化することができたばかりで
なく、前年度に比し、より内容の
充実した事業を実施することがで
きました。これもひとえに会員の
皆さんの積極的な協力のため
の感謝いたしています。

▽会報発行は四十九年度から年四
回となったため、事務局では編集
の都度、記事不足に頭をいためて
います。編集にあたっては紙面の
多彩化と内容の充実を常に考慮し
て、多方面から取材しています
が、なんといいても会員の皆さん
の投稿を編集の基本方針としてい
ます。今後とも皆さんの積極的な
投稿をお願いします。

小田山古墳公園随想

若松の街続き、北海岸の小田山に横穴式石室古墳群がある。戦後心あ
る人士の強い保存要請の声も空しく、都市開発に漸減し、あやや壊滅の
危機に類した。若松郷土会は結束して強力な保存運動を展開し、その熱
意は通じて、時を移さぬ谷市長さんの現地視察を契機に、漸くにして保
存の途が拓け初めた。時よしも、市文化財保護条例が制定されて、第一
回指定に決定、翌年三月には古墳は立派に復原された公園が成り、竣工
式に参列の郷土会の面々は誇らしげであり、危機を防ぎ得た喜びと先住
古人とのタイムトンネルを越えた交流に心温まるものがあつた。

旬日後再度公園を訪れて、アッと驚いた。何と桜花爛漫の下に花見の
宴の賑いである。永遠の眠りから覚まされた古墳の主が、羨道からそつ
と覗き見たもの、桜吹雪の芝生に踊るヒョットコ顔、アッと腰を抜かし
たに違いない。古墳と早々として、意外な市民生活との交流に驚きもし、
嬉ばしくもあつた。小田山からの展望は、右から洞海を隔てて小倉、門
司、山口県の山波が薄藍色に続き、更に左手視野一杯に響灘の水平線が
続いている。沖に今関門海峡を抜けた汽船がゆっくと西に進んでい
る。韓国通いでもあろうか。響灘、玄界灘、沖ノ島、志岐、対馬、韓国
……狗邪韓国、帯方郡……いつしか想いは「魏志倭人伝」をめぐる。日
本古代国家起源の謎を秘める邪馬台国は何処、卑弥呼とは。今、糸島郡
では郷土の考古史家原田大六氏指導の下に、伊都国の発掘調査が実施さ
れている。日本古代国家の起源を巡り、江戸時代から学界を二分しての
論争、諸説対立の中で、伊都国の位置については一致している。「大率」
を置き重きをなした伊都国発掘調査の成果については、日本古代国家の
解明、前進がみられるであろうと、学界識者をあげてその発掘の推移を
興味深く注視している。

邪馬台国下の北九州、ここ小田山古墳に眠る人々は邪馬台の時代から
若干後の人であろうが、古えと変らぬ風光の中で、父祖代々語り伝えら
れたであろう。邪馬台の頃の変遷風聞。北九州には縄文、弥生、古墳遺
跡も多く、由緒深い神社も近い、北九州は決して邪馬台とは無縁の地で
はない。北九州の何処からか、邪馬台解明の一助ともなる貴重な発掘品
が出ないとも限らない等想いは飛躍してくる。都市開発に損われぬ文化
財保護対策の確立、これは一部関係者の努力だけでは至難であり、全市
民的な深い理解と支援が切望される。(藤田敏夫)

No.11 50. 3. 31

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区城内1-1
北九州市教育委員会文化課内
電話 582-2389

北九州市の文化財を守る会

報



市指定史跡小田山古墳群

太宰府天満宮の「斧始祭」を見て

中村雄三

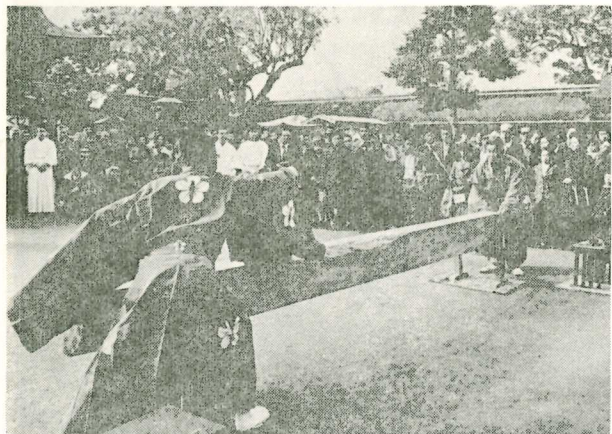
初詣でと進学祈願の人々で賑わう正月四日、太宰府天満宮では、恒例の「斧始祭」が厳かに執り行われた。

その模様は、当日のテレビで放映されたから知る方もさぞ多いものと思うが、今日、全国に神社・寺院は数多くあるけれども年頭にかかる祭儀が執り行われるところは少ない。

この祭儀の見学のため、はるばる京都より来られた大工さんの一行（番匠保存会）と同道する機会にめぐまれたので、ここで従来より考えていた私見をまじえて記してみようと思う。

この「斧始祭」とは、天満宮の普請工事が安穩無事に行われるよう天満宮専属の宮大工らが古式に則って行う祭儀である。

祭儀は、烏帽子・直垂を着用した棟梁大工と、烏帽子・梅鉢大紋を着用した大工二人が、本殿において神に祈念することからはじまり、次いで本殿前に用意された神木（新しい角材）を神官が被い清めてのち、さきの大工二人によって、特別に調えられた曲尺・墨壺・墨志をもって墨付け・墨線をひく儀が行われる。



墨打

そして、次ぎに棟梁大工によって、神木に左端・右端・中央の順で三度び斬立が行われて、この祭儀は終わるのである。

社伝によれば、この斧始祭は康和三年（一一〇一）太宰府権帥・大江匡房によってはじめられたとあるが、確かな根拠があるわけではない。

しかし、今日のように年中行事の祭儀となったのは、天満宮の前身である安楽寺が、その性格を寺

院から神社へ移り変った江戸時代末ごろではなかったかと思われる。当時は正月九日で祭儀に使う大工道具は、今日のものとは違うことが記録に見える。

ところで、一般にこの斧始祭の内容は、「斬立」といい、また古くは「木造始」・「事始」ともい、文獻の上では、およそ十世紀半ばごろまで遡ることができるとする。康和三年にはじめられたと伝える太宰府天満宮の斧始祭は、京都より太宰府の官人として赴任してきた貴族たちか、あるいは京都より派遣された大工たちによってもたらされたものではないかと臆測することができる。

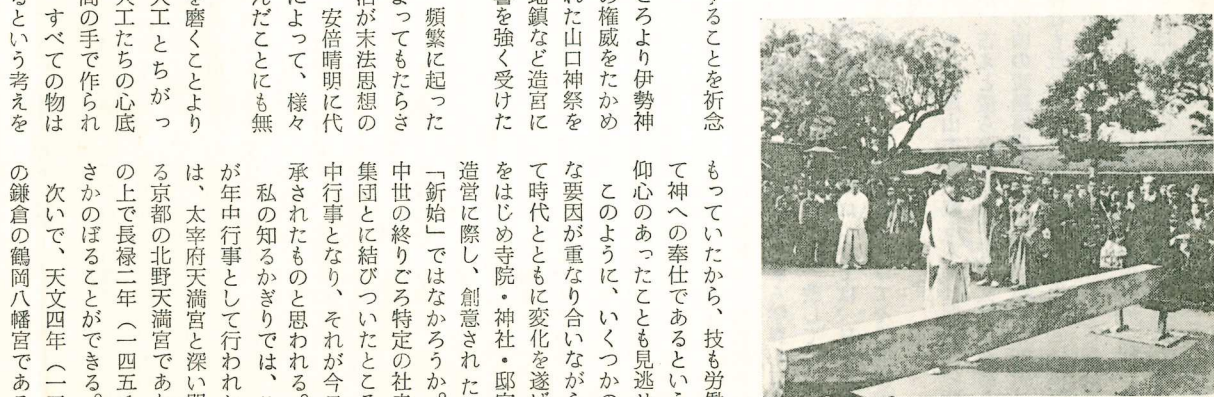
それはともかくとして、時代によって、普請場によって、また大工集団によって、祭儀の内容には僅かながら差が認められるが、常に造営工事のなかでは重要な役割をもっていた。

その由来について考えてみると、まず、すべての古代人は、人間の知と力とでつくられた建物が予期しない天変地異や事故

から免れない危険感をもっていたこと。その恐怖と不安をもたらし、の怒りと信じ、この「荒ぶる神」を斎鎮めるためには、「大殿祭」にみるごとく、忌部氏の職掌として「斎斧」「斎鉏」など呪具をもつて呪術的祭儀を行って、凶から吉へ転ずることを祈念したのである。

また、八世紀末ごろより伊勢神宮が国家神としての権威をたかめるなかで制度化された山口神祭をはじめとする袖や地鎮など造営にまつわる祭儀の影響を強く受けたものと考えられる。

また十世紀後半、頻りに起った動乱と天変地異によってもたらされた悲惨な現実生活が末法思想の流布と結びついて、安倍晴明に代表される陰陽師らによって、様々な呪術・俗信を生んだことにも無関係ではなからう。



斬立

もっていたから、技も労働もすべて神への奉仕であるという強い信仰心のあったことも見逃せない。

このように、いくつかの歴史的必要因が重なり合いながら、やがて時代とともに変化を遂げて宮殿をはじめ寺院・神社・邸宅などの造営に際し、創意されたものが「斬立」ではなからうか。そして中世の終りごろ特定の社寺も大工集団と結びついたところに、年中行事となり、それが今日まで伝承されたものと思われる。

私の知るかぎりでは、この斬立が年中行事として行われた早い例は、太宰府天満宮と深い関係にある京都の北野天満宮であり、文獻の上で長祿二年（一四五八）までさかのぼることができ。

次いで、天文四年（一五三五）の鎌倉の鶴岡八幡宮であろう。

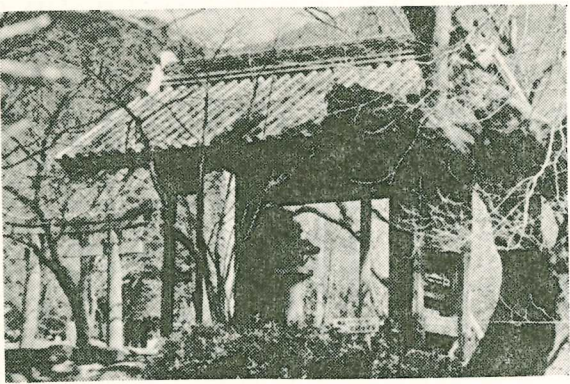
一月に自滅した。

その恩賞として二代將軍源頼家は秋月荘を、原田種雄に建仁三年（一一〇三年）に贈ったのである。原田種雄は秋月荘に入ると共に姓を秋月氏とかえた。以後天正十五年（一五八七年）まで三百八十五年間、十六代に亘ってこの秋月に居たのである。

しかもこの四百年余の時期は、武士階級の争乱を起し続けた時代で、鎌倉幕府も源氏の正統は間もなく絶えたが、北条氏がとって代って文永、弘安の二大困難をどうやら処理し得たものの、その後は財政の窮乏や人心の離反などの為に強力な武士たちは執権職から離れるばかりであった。これが約百四十年余。

更に後醍醐天皇が朝権の回復を企てられた建武の新政も只の一年。はやくも足利尊氏が叛いてそれから凡そ六十年に亘る南北朝抗争時代を生むにいたった。

更に又、延元三年（一三三八年）に足利尊氏は京都で武家政治を再開して、この足利氏の室町幕府は、十五代、二百三十年程続いたが、その後半は所謂群雄割拠時代、即ち戦国時代に入り、幕府の



黒門 古所山城の搦手門で黒田館の大手門

方について多々良浜で足利尊氏と戦っている。

戦国時代には十三代種朝や十四代の種時、更には十五代の種方などが、大友氏の支配を離れるべく抗争している。種方は逆臣に謀られて敗死したが、その一子種実は幼にして毛利氏を頼って逃れた。後に機をみて古所山城を大友氏より奪い返して、旧領や近隣を切り従えて強大なものになった。しかし島津氏と結託して豊臣秀吉に抗したが為に一敗地に塗れたのである。

こんな具合に秋月氏は北部九州地域の群雄割拠のさ中に介在していたので、最初は大内氏に頼り、その後は大友氏へ、更には毛利氏・龍造寺・島津氏へと後権を変えてきている。

秋月種実の所領は「筑前軍記略」によると「十一郡を領す」とあるが、これを新しい現在の地区名で書いてみると朝倉郡、甘木市、飯塚市、山田市、嘉穂郡、三井郡、久留米市の一部、浮羽郡の東部、北九州市の門司、小倉の両区、田川市、田川郡、行橋市、京都郡に亘っていたようである。但し石高は未詳である。

なお、種実は古所山城の外に二十四の支城を持っていたというがそれをここに列記してみる。これは天正十五年四月に種実が生駒雅楽頭に提出した覚え書である。大

隈城、笠城山城、奉行山城、山口城、二股岳城（以上嘉穂郡）、宝満城、鑑ヶ鼻城、三原城（以上筑紫郡）、岩石城（田川郡）、龍ヶ岳城、劍山城（以上鞍手郡）弥永城、片山城、麻氏山城、池田山城、真嶽城、白木山城、長尾城、鳥尾ヶ嶽城、鶴木城（以上朝倉郡）長瀬城、井上城、妙見山城、麦野城（以上浮羽郡）、この外に秋月盆地の中の山や丘毎に柵はあったし、地方に於いても必要に応じて出来ていたものと思われる。

秋月氏一族が新封地高鍋に去ったのは天正十五年で、その後十二年余は名島城にいた小早川隆景の領内にこの秋月も含まれていた。

そして慶長五年（一六〇〇年）に封地換えになった黒田長政が中津より福岡に入ってその領地になった。

黒田長政の三男長興が五万石の領主として、この秋月に入部したのは元和九年（一六三三年）のことである。この時迄二十三年経っている。この年は徳川家光が三代將軍にたつた年であり、黒田長政の死去した年である。恐らくは遺言によってかく履行されたものと思われる。

結 び

明治初頭に時世に対する憤懣が勃発して秋月の乱を起したが、四囲を山岳に囲繞された要害の地であったこの盆地は、やはり住みよい楽天地であったと思われる。（筆者は甘木市文化財調査委員）

この間は至極平穩であったが、只一度徳川治世最後の争乱に出兵している。即ち、寛永十四年（一六三七年）に島原、天草の地に古城跡に拠って農民の反乱が勃発した。而もそれが第一の攻撃軍の手では仲々治まらない。そこで第二攻陣軍の指揮官として松平伊豆守が差遣され、その差図によって、黒田三藩（福岡、秋月、東蓮寺）も出陣することになった。

秋月藩は寛永十五年一月十九日に二千余の陣容で出陣して、該地では特に天草丸の一番乗りを敢行して大手柄をたてている。ともあれ、秋月黒田藩も江戸に藩邸を持ち最初は参勤を続けていたが、後には長崎警備に廻されて長崎文化を多く採り入れるようになった。

投稿

会員のみなさんから、次の原稿が寄せられました。
本紙は会員のみなさんのものです。
文化財についての意見、所感あるいは研究のものなど、何でも結構ですから投稿ください。

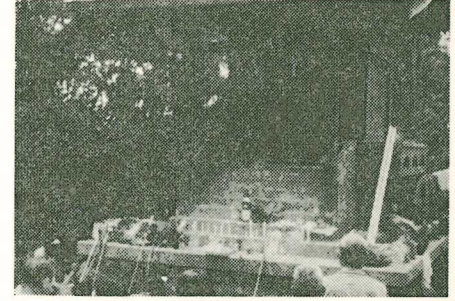
戸上神社御昇りの神事について

門司区 是則 宗興

今年の秋の例大祭も、十月二十三日の御昇りの神事をもって無事終了した。標高約五百二十五米の戸上山頂の草原で、絶景を前に弁当を開き和やかに話し合っていた老若男女の姿が思い出される。

私は例年のことながら、この御昇りの神事に深い意味を感じるのである。その一つは、この神事に古代からの変わらない人の心が伝わっているということであり、もう一つは、明日へ向かって生きようとすると人々の、生活のリズムとも言えるものが見いだされることである。

十月五日に御降りといって、神迎えの神事があり、大祭中いろいろにおもてなしをして、もとの上宮へおかし申し上げるのが、この御昇りの神事である。
古記によると、大同元年に空海



戸上神社上宮

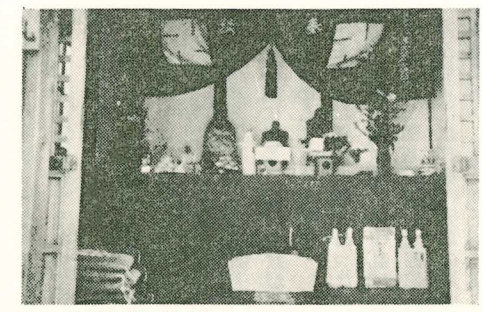
火除け地藏とこく地藏

戸畑区 塚本 智

戸畑区の西鉄バスで、沢見通りから鶴ヶ谷方面に向って行くと、天籟寺バス停がある。
此所から二十米位行くと、左側に小さい路地が有り、是れを遣入ると、境内も綺麗に清掃されたお堂がある。帆柱四国第二十五番札所になっている。是れが火除け地藏である。

御尊体は名の如く火災除けの霊顕あらたかな地藏菩薩で、年代は記して無いが、百五十年か二百年位前の作ではないか、と思われる古い仏像で、其の両脇に一体ずつ石仏が置かれている。
此の火除け地藏の御利益の為めか？昔から此の付近では、火災が起きた事が無いと言うので、地元信仰は勿論のこと、一般の参拝者も多く、私が訪れた時も、菓子や果物等が供えてあった。消防署の守り本尊にでもしたら消防士も大分楽になる事だろう、とは私の愚かな考えである。

縁日は毎月の十四日、安田フルノさんや近所の方々のご奉仕で、掃除や接待が行われ、特に帆柱四国の札拜日(千人詣り)の当日は、朝から多くの善男善女の参拝者が絶えないようである。
今から八十年前前に、萱葺のお



火除け地藏

投稿

会員のみなさんから、次の原稿が寄せられました。
本紙は会員のみなさんのものです。
文化財についての意見、所感あるいは何でも結構ですから投稿ください。

紫川考

小倉南区 中尾多聞

今から約六十年ほど前、江戸後期のことである。長崎の出島から江戸へのぼるため、小倉を通過したドイツ人シーボルトが書いた日記の中に小倉のことがのべてある。それによると、「自分は今、江戸へ行くために小倉へやって来たが、この町の中央にはきれいな川が流れている。江戸天文方の記録によると、この川の名は四つあって、ムラサキ・カモ・シバ・ハリモトという。町には鶴が飛んでいる。そして鶴は禁鳥であるか、私が珍客であるということ、わざわざこの鶴を捕えてご馳走してくれた。」と記している。当時の小倉の町は鶴が棲んでいたということ、何か非常に楽しい気がする。紫川の名前は古くからあるが、その紫の語源はわたしの知る所では、だいたい四つぐらい考えられる。

① 足立山の色が川に映って色が紫に見える。

② 藤の花が川岸に多くその色が川にうつって紫に見える。

③ 木町橋の所に蛇淵という所があつてその淵にすんでいる龍が時々紫の気を吐く。

④ 紫の池から流出している。以上四つの外にも色々説があるようだが、だいたいこの四つが代表的なもののように思われる。この四つの中で特に注意されるのは②と④の説である。すでに故人となつた探銅所の木島甚久氏は第②の説をとり、藤の花のかわりに紫草を考へられていたようである。なるほど紫川の沿岸には薬草園跡もあるし、また平尾台で紫草がみつかったという話も聞いたように思う。紫草は、古代紫、即ち茜色の染料であり、また薬草として珍重されたもので、現在では東北方の山野にわずかに残っているというのである。現在紫川の沿岸では紫草の姿は見るべくも無いが、藤の花は確があつたらしく、私が住んでいる下蒲生の山にはその季節ともなれば、山藤の花が紫の色をみごとに染め出すのである。

第④の紫の池については、下蒲生大興善寺門前の池を、紫の池と呼んでおり、大興善寺鷲峰山縁起にもその名が出ています。現在では豊前誌によれば、「池あり中に一

鳥を築く、上に弁天を祀る、これより流出するを以て紫の名あり。」

と紫の池が紫川の語源に関係があることをのべている。
かつての紫川は南方橋より北に下り上蒲生岩鼻を右にまがるとすぐ左転して、虹山、鷲峰の裾を流れていたと思われる。ということはこの流れは紫の池とつながっていたということになるのである。それが次第に岩鼻より東に移行して現在の水路になったものと思われる。大興善寺門前の字名を中川原(中の川原)というのは、かつてここが川中の洲であつたと考えられるからである。このあたりの山裾は確かに豊富な水脈があるのである。

シーボルトの日記にあげられたムラサキの名の外に、カモ、シバハリモトの中で、カモはこの蒲生(大宰管内誌によると、この地方の名で最も早くあらわれるのは長野と蒲生であり、蒲生とは蒲生ふるの池の意味と考えられる)の名をとつたもので紫の池より上流をカモ川と呼んでいたとの古老の言がある。シバとは勿論志井川のなま

ただ最近考えたことであるが春吉・山本の地名に気づき、あるいはこれによるものかと思つたことである。然しこれに対する確証は

常盤橋

小倉北区 竹下 清

小倉区の中央部を流れる川を紫川と云う。河口に近い所に常盤橋がある。細川公が小倉に築城の折懸けられしもので、当時は大橋と云つた。東曲輪を開発ありし頃までは、今の室町の所は高浜浦といひ、漁人の住所であつた。その漁家を今の長浜にうつした。また西側の漁家も平松にうつした。
小笠原時代の寛永十一年から同十二年にかけて架け替えられた。その名の通り、大橋であった。
その後、元禄五年から同七年にかけて、長さ二十四間、幅四間もの架け替えられ、欄干には唐銅擬宝珠左右二十二あつたと云う。また常夜燈籠もあつた。九州の諸大名は参勤交代の折、ここを利用した。(小倉市誌)
文政の初め、常盤橋の橋脚は虫害に侵かされた。時の郡代杉生貞則は、いろいろと手をつくした。
銅板を巻く、釘を打つ、鯨油の入つた桶を巻き立てるなどしたが、いつこうに効験現われず、やむなく石柱を一、二本建てて試みてはと申し出た。下役は評して「川底は砂地である故、水勢によって柱がずり下がり、または洪水のときなど、流水の衝突等に折損は必定ならん」と、貞則は工夫の末、公の許可を得、石柱を建てるにあたりよく揺り込み二本建てて見た。果して成功、根本が下がることも、流水等による折損もなかった。数年後、ご褒賞として反物を賜わつた。以後杉生工法を見ながら、橋脚は石材「花崗岩」を用いることになった。(小倉市誌)

【参考事蹟】

その一、小倉北区寿山小学校の近く、酒井氏(石材商)の宅に、石の橋脚らしきものが四本ある。内一本に「文政十年歳建之。」また他の三本には上部に三角の印が刻んである。いずれも直径五十五センチある。杉生貞則が常盤橋に使用した最初のものと思われる。
その二、妙見山麓近くに福岡相互銀行家族寮があるが、この庭園の池に石柱が立っている。水面より一・五メートル出ている。「天保三壬辰年六月寅日建之」との銘がはつきり見える。石柱の直径も前記酒井氏所有のものと同程度と同じである。
その三、小倉北区上富野四丁目蔵内修造氏宅(幕末時代の大庄屋林幾之助屋敷跡)に石柱の門が立っていた。高さ三メートル余、直径五十五センチ。花崗岩で薄茶色に変色。おそらく常盤橋の橋脚と